

韓国慶尚北道星州郡における金融危機後の帰農現象

澁谷 鎮明*

“Return to the Farm” after the Financial Crisis of Korea in Sungju County, Kyungsang-buk Province

Shizuaki SHIBUYA *

1. はじめに

1997年の韓国金融危機の際に、それにとまなう社会問題として非常に大きく取り上げられたものの一つが失業問題である。韓国では、金融危機の際に17,000社あまりが倒産し、2%程度だった失業率は8%近くまで上昇した。失業者数は178万人におよび、労働者20人に1人が失業したとされる。また失業は男性よりも女性に、若年層、未熟練労働者に集中した。

この時期に政府のさまざまな支援策が行われたが、急速な失業者の増加には追いつけず、失業者は自ら対応することを余儀なくされた。その中で、当時の韓国における報道で目を惹いたのは、失業者が農村に移住し、農業を始めるというものであった。これは象徴的な例として取り扱われていたように思われるが、実は以前より都市のブルーカラーの人々の中で、何らかの理由で職場を解雇された場合に農村に行き、農業に従事する傾向があった。生活に困った際にとりうる一つの選択肢として農業があったのではないかということである。

金融危機で失業者が増加した際に、どれくらいの人々が農村に移住し、農業に従事するという選択肢を選んだのであろうか。また、金融危機の際に農業が失業者の「受け皿」になり得たのであろうか。このように都市で働いていた人々が、失業したからといって農村地域で農業に従事するというのは、日本ではあまり考えられない選択肢である。しかし韓国においては、日本よりも急速に経済成長と社会変化が進んだため、社会で活躍する40～50代の人々は、地方出身者であれば青少年期に農業従事者比率がきわめて高い時代を経験している。そのため、両親が農業をしている可能性も高く、職業の選択肢として農業が残りをたとも考えられる。

* 中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

このような韓国における動きについては、複数の分野からの先行研究が行われている。その多くは農学分野からのアプローチであり、金融危機以前より行われている。例えば、ソ・ギュソン(1998)は、金融危機以前の1990年代においても、このような現象が次第に増えていることを報告しており、それらの人々への教育プログラム作成の必要性を指摘している。このように農学分野では、以前から農業従事者（あるいは後継者）の減少問題と、新規就農者に生じる問題についての研究が行われてきた。そのような中で、金融危機を契機とした就農者の増加が見られたことから、この時期の就農者に対する定量的な実態調査と、支援対策について述べた研究や報告が増加した。そのような就農者の特性については定量的分析が多く、また金融危機の時期については、ある地域に注目するよりも韓国における全体像を探ろうとする特色がある。

一方、筆者の専門分野である人文地理学においては、過疎などの農村地域における問題や、都市—農村間の問題に関する研究蓄積が存在し、新規就農者の問題についても注目されていた。例えば、ウ・ジョンヒョン(1997)は、金融危機前の「帰郷農家」の発生と適応について報告している。出身地に帰郷して農業を再度行うという現象は以前よりあるものの、近年は農業による収益を考え、大規模な農業を始める帰郷農家も見られることを指摘し、帰郷農家が農村に新たな動きをもたらす可能性について述べている。

ところで、このように都市で生活し、ブルーカラーやホワイトカラーの業種についていた人々が、仕事を辞めるなどして農村に入り、農業を始めることを、韓国では「帰農」と言い、その人々を「帰農者」と表現する時がある。この帰農者が、金融危機の際に農村に流入しているのであれば、金融危機前後の帰農者の状況を見ることで、金融危機の韓国農村への影響の一面をもとらえられるのではないか。

本稿では、韓国慶尚南道^{ソンジュ}星州郡における金融危機前後の「帰農者」、すなわちその他の業種を辞め農業を始めた人々が、どのような属性を持ち、どのような状況で農業を選び、その後いかなる状況にあるのかについて、2005年8月と11月に行ったインタビュー調査を交えながら考察したい。

本稿で取り扱う星州郡は、ブランド化した農産物であるマクワウリ（写真1・韓国語では「チャメ」）の栽培で農家の収入が高く、帰農者が比較的多い地域である。この星州郡における金融危機前後の帰農者の状況を把握することで、金融危機の際の韓国農村の社会変動の一面を探りたい。



写真1 星州のマクワウリ

2. 現代韓国における帰農現象と星州郡の位置づけ

まず、現代の韓国での「帰農」という語の示すものと、帰農する人々の状況について確認するとともに、その中で^{ソンジュ}星州郡の位置づけを見ておきたい。

韓国で「帰農」という語は、やや多義的に用いられているようである。本来帰農とは、何かの理由で農業を離れていた者が農業をはじめことを示し、「人間本来の生活である農業に戻る」というような含意もあるようである。しかしながら、現在の用いられ方を見ると、新規就農者も「帰農

者」として捉えられていることから、ひろく再就農者や新規就農者が帰農というカテゴリーに含められているように思われる。また、農家の子弟が都市へ出て働き、その後に故郷に帰って後継者になるような場合も、「帰農」という語でひとくくりにされているように思われる。このような帰農という語は、韓国の農林部ホームページにも「帰農案内」のコーナーが設けられていることを見ても、韓国においては広く用いられる語となっている。

また本来は帰農という語には地域的、空間的な意味が付与されていなかったのではないかとも思われるが、複数の文献に「Uターン帰農者」という語が用いられるようになっていく。これは都市部でブルーカラー、ホワイトカラーなど農業以外の業種に従事した後Uターンして故郷に帰り、農業に従事する人々を指すので、都市から農村への移動と関連づけられ、空間的な意味が付け加わっていると思われる。

韓国全体で見ると、表1のように帰農農家は次第に増加している。1990年頃には200～300世帯程度であったものが、次第に1,000世帯をこえるようになってきている。特に本稿が注目する金融危機前後の状況をみると、金融危機直後の1998年には、前年（1997年）が1,841世帯だったのに比して、6,409世帯に急増している。

この点について、例えば帰農農家の実態調査を行ったクォン・ヨングン（2001）などは、このような帰農世帯の急増は、金融危機による都市における失業問題の悪化がもたらしたものとしている。韓国経済はこの後急速に回復していくが、帰農者数も1998年をピークに1999年以後減少に転じる。

しかしながら、ここに表れた数字は、韓国全体で考えた場合、きわめて微々たる人数である。表1に1990年から2000年までの帰農農家数の累計が約18,000戸であることが示されているが、2000年の韓国の総農家数は138万戸であり、全体に大きな影響を与えるほどの数ではない。そう考えると、金融危機の際に失業者が続々と帰農したのではなく、あまり一般的でない選択肢の一つとして存在したということだろう。

表1はまた、数は少ないものの以前より帰農は行われていたということも示している。この点について、金再洪（1998）は、「帰農はIMF事態（金融危機）によって発生した特別の現象ではない。帰農者は1990年以来継続して増加していたが、IMF事態によって目に見えるようになっただけである」と述べている。

これまでそのような帰農者はどのような経路を経て農業に従事したのであろうか。表2はそれらの帰農者の経路を示している。その中で最も多いのは農村出身者が都市へ出て働き、故郷の農村に戻って農業に従事するパターンである。その次に多いのは都市出身者が農村へ移動する例である。

さらには、農村出身者が都市へ出て働いた後、出身地ではない農村に移動し、そこで農業を営む例もある。これは日本では考えにくいケースであるが、この資料によれば全体の1割強がこのパ

表1 韓国における年度別帰農現況
(単位：世帯)

年 度	帰農農家数	累 計
1990	371	371
1991	299	670
1992	413	1,083
1993	618	1,701
1994	662	2,363
1995	922	3,285
1996	2,060	5,345
1997	1,841	7,186
1998	6,409	13,595
1999	4,118	17,713
2000	1,154	18,867

(クォン・ヨングン・2001)

ーンの帰農者と言うことである。また「移動なし」というケースも、帰農イコール転居ではないということを示す例であり、留意すべきである。

また表3は年齢別の帰農理由の割合を示したものである。これをみると、全体を通じて確認できるのは、都市での所得が少ないために帰農するケースが多いことである。また年齢と関係するものとして、40代までは「農業の後継者になるため」という理由が比較的多く、また当然のことではあるが50代以上の年齢層に、「老後への備え」、「健康のため」などの理由が占める割合が高くなる。ここには「失業したため」という回答が示されていないが、考えようによっては、所得の問題と関連するのかもしれない。

このような帰農者が農村地域で農業を始めた場合、あるいは始める前には、何らかの問題を抱え

表2 帰農経路

	農村→都市→故郷農村	農村→都市→他郷農村	都市→農村	移動なし	その他
世帯数	205	50	99	6	6
構成比	56	13.7	27	1.6	1.6

(クォン・ヨングン・2001)

表3 年齢別帰農理由

(単位: %)

年齢区分	農業を したいため	農業の後継者 となるため	都市での所得 が少ないため	事業の失敗	老後への 備え	田園生活を 望んで	健康のため	その他
29歳以下	37.9	21.8	26.3	1.8	0.7	4.9	2.1	4.6
30～39	29.5	16.6	35.9	6.8	0.7	4.4	2.1	4
40～49	25.5	12	35.6	7.2	4.5	6.3	3.9	4
50～59	16.2	3.9	29.7	6.4	21	11.7	8.5	2.6
60歳以上	10.3	1.1	22	6.3	41.1	9.4	7.7	2.6
合 計	25.2	12.4	32.8	6.4	8.7	6.6	3.7	3.7

(クォン・ヨングン・2001)

表4 地域別帰農農家

(単位: 戸)

地 域	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	計
釜 山	0	0	1	1	0	1	6	2	11
大 邱	5	5	6	8	11	8	4	3	50
仁 川	5	4	6	0	5	11	1	16	48
京 畿	52	31	31	37	39	45	469	235	939
江 原	23	15	21	45	80	88	176	125	573
忠 北	17	22	38	51	77	80	159	146	590
忠 南	21	27	28	40	34	52	104	172	478
全 北	8	12	30	57	68	62	211	152	600
全 南	28	26	51	69	70	101	108	160	613
慶 北	67	76	94	178	164	243	492	448	1,762
慶 南	130	81	101	133	119	229	294	309	1,396
済 州	1	5	4	3	3	2	36	55	109
計	357	304	411	622	670	922	2,060	1,823	7,169

(趙東錫, 1998)

る場合が多い。ソ・ギュソン（1998）によると、Uターン帰農者の抱える問題として、資金不足や営農基盤づくりの困難さ、営農技術不足、農産物販売の難しさ、周囲の人々の視線、人手不足などをあげている。

次にこのような帰農者はどの地域に多いのかを見てみたい。表4は韓国における地域別の帰農農家の変遷である。1998年以降の資料がなく、金融危機との関連を見ることはできないが、全体として帰農者は京畿道、慶尚南北道に多いことが理解される。また1990～1997年まで帰農者が最も多かった慶尚北道の市郡別の帰農農家数を表5に示しているが、本稿で扱う星州郡が最も多いことが理解される。

表5 慶尚北道における地域（市郡）別帰農農家
（1990～1997年合計、単位：戸）

地 域	戸 数	地 域	戸 数
浦項市	156	青松郡	65
慶州市	44	英陽郡	54
金泉市	143	盈徳郡	31
安東市	98	清道郡	111
亀尾市	30	高靈郡	33
榮州市	69	星州郡	159
永川市	113	漆谷郡	55
尚州市	101	醴泉郡	118
聞慶市	60	奉化郡	75
慶山市	26	蔚珍郡	26
軍威郡	43	鬱陵郡	11
義城郡	141	計	1762

（趙東錫，1998）

3. 星州におけるマクワウリ栽培の展開

本稿で対象地域とする韓国慶尚北道^{ソング}星州郡は、前述のように特産物であるマクワウリの生産に特化した地域である。この地域で生産されるマクワウリは韓国国内でブランド化しており、収入が多い農村地域として認識されている。他の農村地域からは「金持ちの農村」と見られるほどである。このような地域の特徴が、前述した帰農者の多さと関連していると考えられるため、この地域の農業とマクワウリ栽培について整理しておきたい。

（1）星州郡の概観と農業の動向

星州郡は慶尚北道の南部に位置し、人口250万の大都市である大邱広域市から西に30kmほどのところにある。郡の東部の大邱市に近い地域は、同市の郊外と認識されている。人口は郡全体で5万人程度（51,761人・2002年）であり、ここ数年は横ばい状態である（表6）。

星州郡の農家人口は22,014人（2002年）で、農家数は8,023戸（2002年）である。このうち専業農家が6,985戸と90%近く、全国平均に比べてかなり高い（表7）。また全体として農家数は減少し、専業農家の占める割合が増加している。

この地域は、マクワウリをはじめとする果菜類の栽培が盛んで、特にマクワウリが1990年代後半からブランド化し、他の地域を凌駕している。図1は、星州郡の農業生産面積の推移を示したものである。これを見ると、まず1992年から1996年にかけて、米・麦などの食糧作物の栽培面積が減少し、その代わりに果菜類、中でもマクワウリの面積が増加している。詳しくは後述するが、マクワウリは水田をつぶし、ビニールハウスを作って栽培することが一般的であり、マクワウリの栽培面積の増加と食糧作物栽培面積の減少が関連している。また1990年代前半には、マクワウリ以外の果菜類、たとえばスイカなども栽培されていたが、次第にマクワウリの栽培面積が果菜類栽培面積のほとんどを占めるようになり、マクワウリに特化していったことが読みとれる。

筆者が1990年ころ星州郡を訪れた際には、まだ水田が多く、ビニールハウスはさほど多くなか

表6 星州郡の人口推移

(住民登録人口)

年	世帯数	人 口
1992	16,949	55,024
1993	17,448	54,764
1994	17,678	54,229
1995	18,077	54,033
1996	18,421	53,899
1997	18,680	53,516
1998	18,403	53,106
1999	18,403	52,771
2000	18,362	51,617
2001	18,456	50,933
2002	18,948	52,322

(『星州郡統計年報』, 2003)

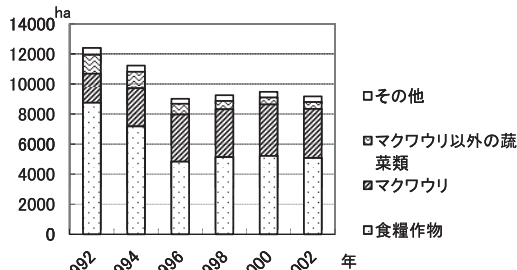
表7 星州郡の農家および農家人口

(単位: 戸)

	農家数	専 業	1種兼業	2種兼業
1992	9,940			
1993	10,024			
1994	10,142			
1995	10,414			
1996	10,327	6,713	1,549	2,065
1997	10,008	6,505	1,501	2,002
1998	10,353			
1999				
2000	9,228	7,988	806	434
2001	9,222	7,906	868	448
2002	8,023	6,985	665	373

(『星州郡統計年報』, 1998, 2003)

図1 星州郡の農業生産面積



(『星州郡統計年報』, 1998, 2003)



写真2 1992年頃の水田の多い農地

った (写真2)。しかもその時期にはビニールハウスでは、さまざまな作物が栽培され、マクワウリもあったものの、蔬菜類やイチゴ、スイカの栽培も盛んであった。その後次第にマクワウリの栽培に特化し、写真3に見られるような、ビニールハウスだらけの景観に変わっていったものと思われる。

1990年代後半にはいと、マクワウリの栽培面積の増加は3,000ha強で止まり、同時に食糧作物を含めたその他の作物の栽培面積の減少も抑えられており、おおよそマクワウリの栽培自体が安定してきたものと思われる。



写真3 現在 (2005年) の農地の状況

(2) 星州郡のマクワウリ栽培

この地域のマクワウリ栽培は、星州郡に隣接した漆谷郡^{チルゴク}でも行われているが、そこでは1960年代までは、あまり商業性のない露地栽培が行われていたとされる。その後1970年代に市場出荷を

念頭においたトンネル早熟栽培が行われるようになり、1980年代には隣接する漆谷郡、高霊郡コリョンなどとともに、星州郡は全国の代表的主産地となっていた。またその中でも栽培面積が最も多かったのは星州郡であった（李徳出、1995）。

1992年に星州のマクワウリ栽培と流通に関して調査を行った金東春らによると、当時マクワウリ栽培はトンネル栽培とハウス栽培が行われていた。そして、年配の農業従事者がトンネル栽培（写真4）を好み、若年層はハウス栽培を行う傾向にあったとされる。現在はほとんどトンネル栽培が見られないことから、この時期以降にハウス栽培が増加したものと考えられる。

また、この当時の施設栽培は、12月上中旬に播種し、1月中下旬に施設内に定植し、3月下旬に収穫するものであった。またハウスをそのままにして続けて収穫する延長栽培と、種子を再播種して栽培し、10月頃まで収穫をする二期作栽培が行われていた。現在も収穫時期と延長栽培、二期作栽培の方法は変わらないが、播種の時期は若干早くなり、11月には播種が行われている。



写真4 1992年頃のトンネル栽培

この当時のマクワウリの作付類型は、①ハウス栽培＋延長栽培、②ハウス栽培＋二期作栽培、③ハウス栽培＋稲、④トンネル栽培＋稲であったとされる。このうち①の「ハウス栽培＋延長栽培」が調査農家全体の85%を占めていた。現在も①の類型が多い点は大きな変化はないものと思われるが、上述のようにトンネル栽培自体がほとんどなくなったために、現在では④の類型はほとんどないものと思われる。またマクワウリ栽培のハウスがある農地の多くは、以前水田だったところである。近年では、地力を回復するために再び水稻栽培を行う場合があり、その場合、上記の作付類型の①の農家なども水田耕作を行う場合があるだろう。

マクワウリの出荷・流通に関しては、1990年代前半の調査によると、出荷量の6割近くが委託販売や、蒐集商（先物業者）を通じた販売経路であり、直接取引や、集荷場を通じた共同販売の比率は低かった（金東春ほか、1994）。しかし現在では、個人出荷も依然として多いものの、蒐集商はほとんど見られなくなり、公販場（自治体等が設置した卸売市場）等を通じたいわゆる「系統出荷」がかなり行われている。なお近年では同じ農作物を栽培・出荷する農家のグループである「作目班」が作られることが多くなり、この作目班を通じた共同出荷も一般的になってきている。

星州マクワウリのブランド化の進行に伴い、郡庁や農協なども販売経路の整備を行うとともに、さまざまなイベント行事を通じた宣伝広報に力を入れている（写真5、6参照）。

近年、韓国の農業についての大きな変化としてインターネットを利用した直接販売や「E マート」などの「割引店（量販店）」との契約販売などの存在があげられるが、星州においても、農協のホームページを通じた、あるいは作目班が管理するホームページを通じたインターネット販売が行われている。

このような星州郡のマクワウリ栽培を中心とした農業は、1997年の金融危機の時期にはどのような状況を迎えたのだろうか。金融危機直後は、農業にはいくつかの影響があったものと考えられている。その主たる影響は、第一に為替レートが下落したために、海外から飼料を輸入している畜



写真5 星州郡庁入口のマクワウリの絵



写真6 街灯につけられたマクワウリのマーク

産業などへの影響であり、第二には、韓国全体での消費の落ち込みのために、販売量そのものが減少するなどの影響であった。

しかしながら、星州郡においては、1996年以前に比べ、マクワウリの生産量はほとんど変化していない。農家や郡庁におけるインタビュー調査においても、マクワウリの生産に関しては大きな影響がなかったとの認識があった。郡庁関係者の認識によれば、マクワウリという作物が、基本的に為替レートの影響を受ける作物ではなく、しかも贅沢品ではないために消費の落ち込みの影響があまりなかったのではないかとのことである。

4. 星州郡における帰農者の特性

前章で述べたようなマクワウリ栽培が大規模に行われており、他の地域と比べて農業による所得が多いと思われる^{ソンジュ}星州郡において、帰農者はどのように考え、どのようなタイミングで帰農し、いかなる状況に置かれているのであろうか。2005年に筆者が行ったインタビュー調査をもとに探っていきたい。

なお、調査は2005年8月と11月に星州郡内の帰農者12名を対象として、属性、帰農に関わる事項、農業に関わる事項を中心にインタビューを行った。その内訳は、金融危機直後に帰農した者が9名、それ以前に帰農した者が3名である。

またインフォーマントの選定は星州郡庁担当者の紹介によったため、インタビュー対象者の生年が1960～1970年代頃までに集中し、帰農時の年齢が20歳代後半から30歳代となったが、韓国全体で見て、帰農者の年齢は30歳代が約半数を占めるため、それほど特殊な事例だけをあげたことにはならないと考える。

(1) 金融危機後の帰農者の特性：帰農の時期と属性

表8～10は、金融危機後の帰農者に対するインタビューの内容を整理したものである。

表8を見ると、番号3と10の2名の帰農者は、星州郡出身者ではない。例えば番号3の帰農者は、星州郡から20km程度離れた大邱市^{テグ}の出身者であり、大邱市において天主教の生活協同組合に従事していたが、そこで「農業サルリギ（再生）運動」をしたことが契機となり、星州郡でキノコ栽培、養蜂などを始めている。また番号10は、大邱市出身でソウルにて小工場を経営していたが、その

表8 星州郡における金融危機後の帰農者の特性(1)―帰農の時期、属性など

番号	生年	出身地	帰農前の職業	帰農直前の居住地	帰農動機	帰農時期	家族構成
1	1966	星州	建築資材販売 →イベント業	大邱市内	妻は職場で活躍していたが、自分だけが失職状態であったため	1998	夫婦 + 息子2人
2	1973	星州	重機の運転手	大邱市内	IMF（金融危機）の影響	1998	夫婦 + 子供3人
3	1967	大邱	天主教生活協同組合	大邱市内	天主教の教区活動で「農業サルリギ運動」をし、自分でも農業をしたくなった	1998	夫婦 + 子供2人
4	1970	星州	ゴルフ場勤務	大邱市内	IMF（金融危機）の影響で職場に居づらくなったため	1997	母、弟、夫婦、子供2人
5	1970	星州	運転手	星州郡内		1997	5名
6	1964	星州	ホテルの日本料理店	大邱市内	父母を養うため	1998	母、叔父、夫婦、子供2人
7	1969	星州	運送業	大邱市内	IMF（金融危機）の影響	1999	母、夫婦、子供2人
8	1965	星州	保険代理業	大邱市内	父母が体を悪くして、保険業ならここでもできるので帰ってきたが、結局農業も引き継いだ	1997	母、夫婦、子供3人
9	1964	大邱	小規模な工場の経営	ソウル	子供のために来た。空気も環境もよいので	1999	夫婦 + 子供3人

表9 星州郡における金融危機後の帰農者に対する特性(2)―農業など

番号	現在の栽培作物と面積	出荷方法	作目班	年間総売上	土地所有	帰農時の借入れ資金
1	マクワウリ3,000坪+米1,300坪	ソウルに自分で直接出荷	参加	8,000万ウォン	自分の土地が300坪+父母の土地	1,900万ウォン借入れ
2	マクワウリ4,000坪+米600坪	個別出荷と作目班の系統出荷	参加	7,000～8,000万ウォン	約3分の1が自分の所有、残りが借地	農業経営人資金、3,000万ウォンを借り入れ
3	キノコ施設栽培+養蜂+米	公販場と直接販売	参加	キノコ3,000万、養蜂1,000万ウォン		帰農用融資1,900万ウォンを受けている
4	マクワウリ3,200坪+米1,400坪	農協を通じての出荷	参加、契約販売あり	7,000～8,000万ウォン	1200坪が両親のもの、残りは借地	両親のものを引き継いだので、借り入れなし
5	マクワウリ3,000坪+米1,000坪	作目班の系統出荷+個別出荷+ホームページ販売（農協）	参加	3,000万～3,500万ウォン	自分の土地が1,600坪+借地	両親のものを引き継いだので、借り入れはほとんどなし
6	マクワウリ3,000坪+米1,000坪	全てインターネット販売（作目班）	参加	5,000万ウォン	自分の土地が1,600坪+小作	農協の一般貸与
7	マクワウリ3,000坪	ソウルに個人出荷	なし	4,500万ウォン	自分の土地が3,000坪+借地1,000坪	両親が農業をしているところに帰ってきたので借り入れなし
8	マクワウリ4,000坪+米1,500坪	ソウルに個人出荷。作目班に参加しているが、共同ではない	参加	去年3,500万、今年7,000万ウォン	全て自分の所有	両親のものを引き継いだので、借り入れはほとんどなし
9	マクワウリ5,000坪+米1,000坪	個人出荷。貨物輸送のみ共同。	参加	6,500万程度	全て借地	全て自分が負担

表10 星州郡における金融危機後の帰農者の特性(3)―問題点など

番号	帰農後の問題点	帰農後のメリット	星州を選んだ理由 (新規就農者のみ)
1	特になし。	父母を養える、働くことができる。	生協や教会であった人から情報を得た。
2	初期資本の問題、営農技術の問題。	固定した収入はないが自分の時間ができる。	
3	新規就農者なのでUターン就農者に比べて不利な点が多い。	農村の生活を希望していたのでそれが果たされた。	
4	技術不足、作目班の人々から教わった。	故郷なので愛着がある。時間が自由になる。	
5	技術の問題。父母はマクワウリ栽培をしていたが自分は経験がなかった。	時間が自由になる。	
6	知り合いが多いので助けてくれ、あまり問題はなかった。	特になし。	
7	低所得が続いている。子供の教育費など支出も多い。	固定給はないが精神的に楽である。	母方の親戚が星州に住んでいてそこから情報を聞いた。
8	妻が都会育ちなので夫婦間の葛藤があった。	特になし。出荷や栽培時期のタイミングも自分で判断しなければならず、会社員のほうが楽である。	
9	人間関係が難しかった。子供の教育問題。	都市にはない人間味がある。大きくみれば子供の教育にもよい。	

表11 星州郡における金融危機以前帰農者の特性(1)―帰農の時期、属性など

番号	生年	出身地	帰農前の職業	帰農直前の居住地	帰農動機	帰農時期	家族構成
10	1969	星州	トラック運転手	蔚山	運転の仕事が体力的につらく、身体のことを考えて帰郷した。	1997	夫婦＋子供2人、同じ村に両親が住んでいる。
11	1969	星州	染色、機械工場など転々とした	大邱	両親がけがをして働き手がおらず、帰ってきた。	1995	両親＋本人
12	1969	星州	会社員	慶尚北道 安康	父母のために帰ってきた。	1996	母、夫婦、子供2人

表12 星州郡における金融危機以前の帰農者に対する特性(2)―農業など

番号	現在の栽培作物と面積	土地の所有	借入資金など	マクワウリの出荷方法	作目班	年間総売上
10	ほとんどがマクワウリ、地力回復のため米を少しだけ作る。	自分の土地が2,000坪＋借地1,000坪	退職金を持ってきたので、借入れなし	ソウルに個人出荷	なし	4,000～4,500万ウォン
11	ほとんどがマクワウリ、米を少し作る。			作目班で出荷、インターネット販売もやっている	参加	
12	マクワウリ3000坪			ソウルに個人出荷	なし	

表13 星州郡における金融危機以前の帰農者の特性(3)―問題点など

番号	帰農後の問題点	帰農後のメリット
10	帰郷して運転手の時よりも収入が減った	自分が帰ってきて、両親2人で農業をしていたときよりもマクワウリ栽培での収入は増加した
11	問題なし	特になし
12	特になし	肉体的にはきついが、精神的には楽である

後星州に転居し、マクワウリ栽培を中心とした農業を始めている。

この2名のケースは、表2に示した帰農経路から考えると、「都市→（他郷）農村」のケースになるものと思われる。特に前者はインタビューからの情報で判断する限り、農業をすること自体に関心があつて新規に就農したものと考えられ、失業に伴う帰農とは基本的に性格が違う。

反対にそれ以外の人々は全て星州郡出身者であり、一旦星州郡外に出た後、故郷に帰るという、「農村→都市→故郷農村」という経路をとったケースになる。これらの人々は、基本的に都市の生活を何らかの理由でやめ、故郷に帰った「Uターン帰農」のパターンである。また、番号5の帰農者は、星州郡内で運転手として勤務した後に、同じ郡内で両親の農業を引き継いでおり、Uターン帰農者と状況は似ているものの、表2の「移動なし」のケースに該当する。

この「都市→他郷農村」、「農村→都市→故郷農村」の移動パターンが表から読みとれるが、基本的に両者は性格が違うものと考えられるため、以下では、この二つのケースを区別しながら述べていきたい。

次に、帰農者が就農するに至った経緯や動機について検討したい。

表8を見ると、その多くが、最も近い大都市である大邱市で職業をもって生活していたこと、その業種がホワイトカラーというよりは、荷物の運送、建築資材販売などのブルーカラー業種や、ホテルなどのサービス業に従事していた者が多いことが理解できる。

帰農の動機と帰農の時期を見ると、番号2、4、7の回答者は直接的な金融危機の影響で失職したか、職場に居づらい状況になり故郷に帰り、その際に農業に従事することを選択している。特に番号2の、重機の運転をしていたインフォーマントは、「会社が不渡りを出し、実質的に失職状態になった」と回答しており、金融危機が影響を及ぼしていることが確認される。また番号1、6についても、金融危機の影響について言及はしていないが、帰農時期が金融危機直後である1998年であり、直接的ではなくとも、間接的な影響を受けたとも考えられる。

また番号6、8の場合、父母の世話をするためとの帰農動機があるが、生年と帰農後の家族構成を見ると、両親を養いつつ、両親が行っていたマクワウリ栽培中心の農業を引き継ぐという傾向も見てとれる。特にマクワウリは現在ほとんどがハウス栽培であり、このような施設園芸は働き手がある程度いなければその維持は困難であることも、帰農の背景にあるかもしれない。

（2）金融危機後の帰農者による農業の経営特性

次に帰農者の農業経営などについて見ると（表9）、栽培作物はそのほとんどがマクワウリであった。マクワウリを主として稲作を行うパターンが一般的であるが、米については、積極的に作るというよりも、マクワウリの連作で弱った地力を回復するために作るようである。またその栽培規模はマクワウリが3,000～4,000坪で、米が1,000～1,500坪程度である。

土地の所有と、帰農時の資金について見ると、Uターン帰農の場合と、新規就農者で大きな違いがあることに気づかされる。Uターンの場合は、両親の土地をそのまま利用したり、あるいは引き継いだりするケースがほとんどで、両親とともに働く場合も多い。また帰農時の資金についても、Uターンの場合には、親の土地や施設を受け継ぐことから借入金等が少なく済むか、ほとんど負担しなくてよいケースもある。逆に別の場所から来て新規就農する場合（表9中、番号3、9）は、受け継ぐ土地や施設がない分、負担が大きくなる。そのためこれら新規就農者は、Uターン就農者

と比べ、何かと不利な点が多いと感じている（表10参照）。また新規就農者は、人間関係などの困難さについても指摘している。たとえばUターン就農者であれば、両親や親戚はもとより、周囲に知人・友人が多く、技術的な問題に直面しても比較的容易に解決できるが、外部から来た新規就農者であれば、そのような人間関係も一から築きあげて行かねばならない。

次に農作物の出荷や販売についてである。出荷については、きわめてさまざまな方法がとられ、Uターン就農者と新規就農者の違いも見られない。たとえば番号1や7の帰農者のように、すべて個人的に出荷するケースから、番号4のように、すべて農協を通じたいわゆる「系統出荷」をしているケース、さらには番号6のように、全てインターネット販売で出荷しているケースまである。また年間総売上額についても、栽培面積に関係するため、かなりのばらつきが見られ、Uターン就農者と新規就農者の違いは見られない。またマクワウリ栽培農家は栽培をマクワウリに特化させているため、出荷の時期や市場の動向によっても売上額に大きな相違が出ることもある。

(3) 金融危機以前の帰農者とその特性

ここまで金融危機後に帰農した人々についてのインタビュー結果を検討してきたが、金融危機以前に帰農した人々はどのような状況だったのであろうか。表10～13は金融危機以前にUターン就農した3名へのインタビュー結果であるが、これをみると、ここまで述べてきた金融危機後におけるUターン帰農者の状況と非常によく似ている。

たとえば番号11の帰農者は、父母が怪我をしたために働き手がいなくなり、大邱市での仕事をやめて1996年に故郷に帰ってきたが、父母の仕事を引き継いでマクワウリ栽培を行っている。また他の2例も基本的な部分は大同小異である。すなわち、若干推測を交えるならば、高校卒業後、大邱などでブルーカラーあるいはサービス業系の職業を持って居住した後、何らかの契機で故郷に戻り、営農技術の問題などを抱えながらも、故郷の知人・友人の助けも受けながら、親の仕事を引き継ぐ形で就農するという選択肢がもともとあるのではないかということである。

ここから考えると、金融危機後のUターン帰農者は帰農動機が金融危機に関わるだけで、他は大きな違いがなく、場合によってはいずれ何かあれば故郷に帰る選択肢をもっていた人々が、若干早くその選択肢を選んだということかもしれない。このことから、本稿で扱った「帰農者」は、日本であれば農業後継者の問題としてとらえられるのではないだろうか。ただし、その背景には星州郡がマクワウリ生産で有名であり、ある程度の収入が期待できるということも大きく作用しているものと思われる。

5. まとめ

本稿では、マクワウリ栽培を中心とした比較的豊かな農業地域である慶尚北道星州郡を例に、金融危機後における「帰農者」の状況を把握し、金融危機の際の韓国農村の社会変動の一面を探ろうとした。

ここでは、本稿で述べてきたことを整理しつつ、星州における金融危機の際の帰農の状況と、それを踏まえて金融危機の韓国農村への影響について考察したい。

まず、金融危機の際の韓国全体の帰農者は、全国的に考えた場合、それほど数ではない。したがって、失業者が増大した際の十分な受け皿になったとは考えにくい。しかしながら、ある程度の

収入が期待できる星州の場合、おそらくは他の地域よりも帰農者が多く発生したものと考えられる。

こうした中で本研究では、星州以外の出身者で都市生活を経て星州で帰農した調査対象者（表2の農村→都市→他郷農村のケース）を調査対象とできなかった点など、十分でない部分もあるが、金融危機の際のUターン帰農のパターンをある程度把握することができたように思う。

星州郡の場合、マクワウリという特殊な作物があり、ある程度の収入が期待できるので帰農が可能である。そのため、本来何かを契機に故郷に帰り、親の世代が行っているマクワウリ栽培の後継者となることができる環境があったのではないと思われる。ただしインタビュー内容から理解できるように、都市においてブルーカラー、あるいはサービス業に従事していた人々が金融危機の際に採りうる一つの選択肢であったと思われ、必ずしもホワイトカラーや高学歴層がこのような形で帰農するものではないだろう。

ある意味では、金融危機を契機として、後継者が早めにUターン帰農するという選択肢を選んだとも言える。

しかしながら、星州のようなブランド農産物がある地域において、大都市での生活経験がある人々が帰農することは、数が少なくともそれなりの意味があるものと思われる。そのような人々は、ほかの人々と異なり、農産物の消費者である都市住民がどのような嗜好や関心を持っているかを体得しているのである。

たとえば、表9に示した帰農者のマクワウリの出荷方法を見ると、Uターン帰農者の中には、すべてインターネット出荷を行っている例がみられる。またインタビューはできなかったものの、Uターン帰農者が作目班を中心に、グループでマクワウリのインターネット販売を行い共同で事務員を雇うなど、これまでの農家にはなかった動きを見せている例もあった。このようなUターン帰農者について研究を行った、前述のウ・ジョンヒョン（1997）も、同様の指摘をしている。さらには、本研究でインタビューを行なった帰農者の中には、その経歴から大卒者と思われるインフォーマントも見られた。今後このような帰農者が、星州のマクワウリ栽培や農業、地域社会を支える人材になる可能性がある。

またここまで述べた内容から、韓国農業や農村社会の特性の一面をうかがうことができるのではないかと考える。たとえば自分の生まれ故郷ではない地域に新規就農者が存在することからは、韓国農村にはそれがある程度は可能な社会があることが想像される。また例えば日本では30～40歳代の壮年層が、都市で雇用がないからと言って、すぐに農村に移住して農業に従事することは困難であるだろう。しかし韓国では、1980年代までは第一次産業従事者割合が非常に高かったため、農村で生まれてさえいれば、それはある程度可能なことである。このように考えると、韓国において農業はさほど望ましくはない生業であるかもしれないが、現在でも選択肢としては存在していることとなる。

[付記]

現地調査にあたっては、星州郡庁セマウル課文化観光係・郭明昌氏の全面的な協力があつた。郭氏の協力なくしては、調査が実施できなかった部分も多い。記して感謝申し上げたい。

【参考文献】

- ウ・ジョンヒョン「帰郷農家の発生原因と適応過程」(韓文)、1997、地域地理学会誌3-1、99-113
- 金再洪「帰農が農村社会に及ぼす影響に関する研究」(韓文)、1998、忠南大農業科学研究25-1、138-147
- 金東春ほか「星州マクワウリの産地流通と経営改善に関する研究」(韓文)、1994、農業論文集(慶北農村振興院)36-2、646-652
- クォン・ヨンゲン「帰農農家実態調査と帰農支援政策の改善法案の研究」(韓文)、2001、大山論叢9、611-634
- 洪承國「慶北地域帰農人の実態と安定的定着方向」(韓文)、2000、慶北大学校農業開発大学院修士論文
- 星州郡『第23回星州統計年報』(韓文)、1983
- 星州郡『第38回星州統計年報』(韓文)、1998
- 星州郡『第43回星州統計年報』(韓文)、2003
- 星州郡『郡政白書』(韓文)、2002
- 趙東錫「地域帰農人の営農実態とその改善対策の研究—漆谷郡の事例研究を中心に—」(韓文)、1998、慶北大学校農業開発大学院修士学位論文
- チョ・ノクファン「帰農世帯の生活実態」(韓文)、1998、農村生活科学19-1、38-41
- 鄭顕家「マクワウリの流通構造分析および合理的系統出荷造成方案—慶北漆谷郡地域を中心に—」(韓文)、1987、慶北大学校修士論文
- 李徳出「漆谷地域マクワウリ栽培の歴史的変遷に関する研究」(韓文)、1995、慶北大学校農業開発大学院修士学位論文
- ソ・ギュソン「Uターン帰農者の長・短期教育プログラム開発」(韓文)、1998、大山論叢6、443-457

“Return to the farm” after the Financial Crisis of Korea in Sungju County, Kyungsang-buk province

Shizuaki SHIBUYA

Abstract

The financial crisis in Korea led to unemployment problems; consequently, a section of the unemployed people moved to the rural areas and began engaging in agriculture. Based on a field survey, this paper aims to explore how and why the unemployed were led to “return to the farm.” The rural areas considered in the study are Kyunggi, Kyungsangnam, and Kyungsangbuk Province; in Kyungsangbuk Province in particular, a substantial number of people moved to Sungju County. Therefore, the paper chiefly focuses on the case of Sungju County in Kyungsangbuk Province. Sungju County is notable for its original plantations of sweetmelons(Chamoe). By the early 1990s, Sweetmelon had already become a big brand in Korea. Nowadays, some farmers earn more than 100 million won from the cultivation of sweetmelon.

The field survey conducted in this study reveals the following characteristics of the people who were part of the “return to the farm” phenomenon: (1) Most of the people are originally from Sungju county (U-turn migration). (2) They are blue-collar workers or workers in service industries in the neighboring city of Daegu. (3) They are in their 30’s or 40’s. (4) They can share the sweetmelon farms owned by their parents. Sweetmelon was expected to be a lucrative source of income for these people.